

令和6年度 富山大学大学院人文社会芸術総合研究科  
人文社会芸術総合専攻（修士課程）人文・芸術プログラム 芸術文化学系  
一般入試・社会人入試・外国人留学生入試  
入学試験問題

# 小 論 文

## 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この試験問題を開いてはいけません。
2. 問題用紙（本文）は6枚、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚あります。問題用紙および解答用紙に不備があった場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
4. 受験番号は、解答用紙の指定欄に算用数字で記入してください。
5. 試験終了後、問題用紙および下書用紙は、持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

諸君は「琴ならし」という道教徒の物語を聞いたことがありますか。

大昔、竜門りゅうもんの峡谷きやうこくに、これぞ真の森の王と思われる古桐ふるぎりがあつた。頭はもたげて星と語り、根は深く地中におろして、その青銅色のとぐろ巻きは、地下に眠る銀竜ぎんりゆうのそれとからまっていた。ところが、ある偉大な妖術者ようじゅつしやがこの木を切つて不思議な琴をこしらえた。そしてその頑固がんこな精を和らげるには、ただ楽聖の手にまつよりほかはなかった。長い間その楽器は皇帝に秘蔵せられていたが、その弦から妙たえなる音ねをひき出そうと名手がかわるがわる努力してもそのかいは全くなかった。彼らのあらん限りの努力に答えるものはただ軽侮の音、彼らのよろこんで歌おうとする歌とは不調和な琴の音ばかりであつた。

ついに伯牙はくがという琴の名手が現われた。御ぎよしがたい馬をしずめようとする人のごとく、彼はやさしく琴を撫ぶし、静かに弦をたたいた。自然と四季を歌い、高山を歌い、流水を歌えば、その古桐の追憶はすべて呼び起こされた。再び和らかい春風はその枝の間に戯れた。峡谷きやうこくをおどりながら下つてゆく若い奔流は、つぼみの花に向かつて笑つた。たちまち聞こえるのは夢のごとき、数知れぬ夏の虫の声、雨のばらばらと和らかに落ちる音、悲しげな郭公かくこうの声。聞け！ 虎とらうそぶいて、谷これにこたえている。秋の曲を奏すれば、物さびしき夜に、剣つるぎのごとき鋭い月は、霜のおく草葉に輝いている。冬の曲となれば、雪空に白鳥の群れ渦巻うずまき、霰あられはぱらぱらと、嬉々ききとして枝を打つ。

次に伯牙は調べを変えて恋を歌った。森は深く思案にくれている熱烈な恋人のようにゆらいだ。空にはつんとした乙女おとめのような冴さえた美しい雲が飛んだ。しかし失望のような黒い長い影を地上にひいて過ぎて行つた。さらに調べを変えて戦いを歌い、劍戟けんげきの響きや駒こまの蹄ひづめの音を歌った。すると、琴中に竜門りゅうもんの暴風雨起こり、竜は電光に乗り、轟々ごうごうたる雪崩なだれは山々に鳴り渡つた。帝王は狂喜して、伯牙に彼の成功の秘訣ひけつの存するところを尋ねた。彼は答えて言つた、「陛下、他の人々は自己の事ばかり歌つたから失敗したのであります。私は琴にその樂想を選ぶことを任せて、琴が伯牙か伯牙が琴か、ほんとうに自分にもわかりませんでした。」と。

この物語は芸術鑑賞の極意ごくいをよく説明している。傑作というものはわれわれの心琴にかなでる一種の交響樂である。眞の芸術は伯牙であり、われわれは竜門の琴である。美の靈手に触れる時、わが心琴の神秘の弦は目ざめ、われわれはこれに呼応して振動し、肉をおどらせ血をわかす。心は心と語る。無言のものに耳を傾け、見えないものを凝視する。名匠はわれわれの知らぬ調べを呼び起こす。長く忘れていた追憶はすべて新しい意味をもつてかえつて来る。恐怖におさえられていた希望や、認める勇氣のなかつた憧憬しょうけいが、栄えはばえと現われて来る。わが心は画家の絵の具を塗る画布である。その色素はわれわれの感情である。その濃淡の配合は、喜びの光であり悲しみの影である。われわれは傑作によって存することく、傑作はわれわれによって存する。

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通は、互譲の精神によらなければならない。美術家は通信を伝える道を心得ていなければならないように、観覧者は通信を受けるに適當な態度を養わなければならない。宗匠こぼりえんしゅう小堀遠州は、みづから大名であり

ながら、次のような忘れがたい言葉を残している。「偉大な絵画に接するには、王侯に接するごとくせよ。」傑作を理解しようとするには、その前に身を低うして息を殺し、一言一句も聞きもらさじと待っていなければならない。宋のある有名な批評家が、非常にももしろい自白をしている。「若いころには、おのが好む絵を描く名人を称揚したが、鑑識力の熟するに従って、おのが好みに適するように、名人たちが選んだ絵を好むおのれを称した。」現今、名人の気分を骨を折って研究する者が実に少ないのは、誠に歎かわしいことである。われわれは、手のつけようのない無知のために、この造作のない礼儀を尽くすことをいとう。こうして、眼前に広げられた美の饗応にもあずからないことがしばしばある。名人にはいつでもごちそうの用意があるが、われわれはただみずから味わう力がないために飢えている。

同情ある人に対しては、傑作が生きた実在となり、僚友関係のよしみでこれに引きつけられるこちがする。名人は不朽である。というのは、その愛もその憂いも、幾度も繰り返してわれわれの心に生き残って行くから。われわれの心に訴えるものは、伎倆というよりは精神であり、技術というよりも人物である。呼び声が人間味のあるものであれば、それだけにわれわれの応答は衷心から出て来る。名人とわれわれの間に、この内密の默契があればこそ詩や小説を読んで、その主人公とともに苦しみ共に喜ぶのである。わが国の沙翁近松は劇作の第一原則の一つとして、見る人に作者の秘密を打ち明かす事が重要であると定めた。弟子たちの中には幾人も、脚本をさし出して彼の称賛を得ようとした者があったが、その中で彼がおもしろいと思ったのはただ一つであった。それは、ふたごの兄弟が、人違いのために苦しむという『まちがいつづき』に多少似ている脚本であった。近松が言うには、「これこそ、劇本来の精神をそなえている。というのは、これは見る人を考

えに入れているから公衆が役者よりも多く知ることを許されている。公衆は誤りの因を知っていて、哀れにも、罪もなく運命の手におちて行く舞台の上の人々を哀れむ。」と。

大家は、東西両洋ともに、見る人を腹心の友とする手段として、暗示の価値を決して忘れなかった。傑作をうちながめる人たれか心に浮かぶ綿々たる無限の思いに、畏敬いけいの念をおこさない者があるう。傑作はすべて、いかにも親しみあり、肝胆相照らしているではないか。これにひきかえ、現代の平凡な作品はいかにも冷ややかなものではないか。前者においては、作者の心のあたたかい流露を感じ、後者においては、ただ形式的の会釈を感じるのみである。現代人は、技術に没頭して、おのれの域を脱することはまれである。竜門りゅうもんの琴を、なんのかいもなくかき鳴らそうとした楽人のごとく、ただおのれを歌うのみであるから、その作品は、科学には近からうけれども、人情を離れること遠いのである。日本の古い俚諺りげんに「見える男には惚ほれられぬ。」というのがある。そのわけは、そういう男の心には、愛を注いで満たすべきさまがないからである。芸術においてもこれと等しく、虚栄は芸術家公衆いずれにおいても同情心を害することはなほだしいものである。

芸術において、類縁の精神が合一するほど世にも神聖なものはない。その会するやたちまちにして芸術愛好者は自己を超越する。彼は存在すると同時に存在しない。彼は永劫えいこくを瞥見べっけんするけれども、目には舌なく、言葉をもつてその喜びを声に表わすことはできない。彼の精神は、物質の束縛を脱して、物のリズムによって動いている。かくのごとくして芸術は宗教に近づいて人間をけだかくするものである。これによってこそ傑作は神聖なものとなるのである。昔日本人が大芸術家の作品を崇敬したことは非常なものであった。茶人たちはその秘蔵の作品を守るに、宗教的秘密をもつてしたから、御神龕ごしんかん（絹

地の包みで、その中へやわらかに包んで奥の院が納めてある）まで達するには、幾重にもある箱をすつかり開かねばならないことがしばしばあった。その作品が人目にふれることはきわめてまれで、しかも奥義を授かった人にのみ限られていた。

茶道の盛んであった時代においては、太閤たいこうの諸将は戦勝の褒美ほうびとして、広大な領地を賜わるよりも、珍しい美術品を贈られることを、いつそう満足に思ったものであった。わが国で人気ある劇の中には、有名な傑作の喪失回復に基づいて書いたものが多い。たとえば、ある劇にこういう話がある。細川侯ほそかわこうの御殿には雪村せつそんの描いた有名な達磨だるまがあつたが、その御殿が、守りの侍の怠慢から火災にかかった。侍は万事を賭として、この宝を救い出そうと決心して、燃える御殿に飛び入って、例の掛け物をつかんだ、が、見ればはや、火炎にさえぎられて、のがれる道はなかったのである。彼は、ただその絵のことのみを心にかけて、剣をもつておのが肉を切り開き、裂いた袖そでに雪村を包んで、大きく開いた傷口にこれを突っ込んだ。火事はついにしずまった。煙る余燼よじんの中に、半焼の死骸しがいがあつた。その中に、火の災いをこうむらないで、例の宝物は納まっていた。実に身の毛もよだつ物語であるが、これによって、信頼を受けた侍の忠節はもちろんのこと、わが国人がいかに傑作品を重んじるかということが説明される。

しかしながら、美術の価値はただそれがわれわれに語る程度によるものであることを忘れてはならない。その言葉は、もしわれわれの同情が普遍的であつたならば、普遍的なものであるかもしれない。が、われわれの限定せられた性質、代々相传の本性はもちろんのこと、慣例、因襲の力は美術鑑賞力の範囲を制限するものである。われらの個性さえも、ある意味においてわれわれの理解力に制限を設けるものである。そして、われらの審美的個性は、過去の創作品の中に自己の類縁を求

める。もつとも、修養によつて美術鑑賞力は増大するものであつて、われわれはこれまでは認められなかった多くの美の表現を味わうことができるようになるものである。が、畢竟<sup>ひつきよう</sup>するところ、われわれは万有の中に自分の姿を見るに過ぎないのである。すなわちわれら特有の性質がわれらの理解方式を定めるのである。茶人たちは全く各人個々の鑑賞力の及ぶ範囲内の物のみを収集した。

これに連関して小堀遠州に関する話を思い出す。遠州はかつてその門人たちから、彼が収集する物の好みに現われている立派な趣味を、お世辞を言つてほめられた。「どのお品も、実に立派なもので、人皆嘆賞おくあたわざるところであります。これによつて先生は、利休にもまさる趣味をお持ちになつてゐることがわかります。というのは、利休の集めた物は、ただ千人に一人しか真にわかるものがいなかったのでありますから。」と、遠州は歎<sup>たん</sup>じて、「これはただいかに自分が凡俗であることを証するのみである。偉い利休は、自分だけにおもしろいと思われる物をのみ愛好する勇氣があつたのだ。しかるに私は、知らず知らず一般の人の趣味にこびている。実際、利休は千人に一人の宗匠であつた。」と答えた。

岡倉寛三（天心）著、村岡博訳『茶の本』（岩波書店、一九二九年初版、二〇〇七年第一〇六刷）より

問 筆者の芸術鑑賞に関する考えをふまえ、各自の専門分野で優れた作品とされているものをあげ、なぜそう評価されているのか、またあなた自身はどう思うのか、八〇〇字程度で述べなさい。